

氏名	水上晃実
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第193号
学位授与年月日	2016年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	教師の称賛が中学生の学習における内発的動機づけに与える 影響 - 教師—生徒コミュニケーションの立場から - (The Influence of Teacher Praise on Intrinsic Motivation among Junior High School Students from the Perspective of Teacher- Student Communication”)
論文審査委員	主査 教授 笹尾 敏 明 副査 教授 佐々木 輝 美 (獨協大学) 副査 教授 鄭 仁 星 副査 上級准教授 大 川 洋

## 論文内容の要旨

学校教育とは教師と生徒とのやり通りの中で実践されていくものである。これを坂元(1981)は、教授-学習過程におけるコミュニケーションとして図式化した。教育を教師と生徒とのコミュニケーションと捉えた場合、送り手である教師のコミュニケーション能力が重要となる。そう考えると、教師の発信方法が生徒の学習の効果を左右するとも言える。

本論文は、学校内において教師が生徒へ発信するコミュニケーション行動の内、称賛行動に焦点を当てている。称賛の研究は、これまで言語的報酬の効果として検討されてきた。言語的報酬は、動機付けの研究においては外発的動機付けに分類される。外発的動機付けには、ご褒美などが含まれており、例えば、学習者にご褒美を与えると、学習者の目的が学習内容からご褒美に移行してしまうため、学習者の内発的動機付けは低下してしまうことが分かっている。つまり、外発的動機付けは内発的動機付けを下げってしまうのである。しかし、「よくできました。」などの言語的報酬は、外発的動機付け

に分類されながらも学習者の内発的動機付けを低下させない、もしくは上昇させるという研究結果がこれまでに多く報告されてきた (Deci, 1980; Delin & Baumeister, 1994; Hurlock, 1925)。

また、桜井 (1987) は、称賛と叱責の関係を父親・母親・教師別に検討しており、称賛が子どもの内発的動機付けを高める傾向にあり、称賛・叱責のパターンが子どもの内発的動機付けと相関関係にあるのは教師であることを明らかにしている。また、動機付けの研究において、小学校高学年から中学生にかけて内発的動機付けが低下していくという知見がある (Blyth, Simmons & Carlton-Ford, 1983; Gottfried, Fleming & Gottfried, 2001; Fredricks & Eccles, 2002; Corpus & Iyenger, 2005; Harter, 1981)。

本研究では、研究の対象を中学生とし、研究の目的を「中学生の学習における内発的動機付けを高める称賛方法を教師 - 生徒コミュニケーションの観点から検討すること」とし、以下の2つのリサーチクエスチョンを設定した。

1. 「親しみのある教師」および「厳しい教師」による「過程称賛」と「結果称賛」は、生徒の学習における内発的動機付けを高めるであろうか。
2. 称賛方法による内発的動機付けの検討において、性差は見られるであろうか。

まず、研究1として、中学生はどのような先生にどのような場面でどのようなほめられ方をすると嬉しいかについて質問紙を用いて調査し、「教師の称賛による嬉しさの感受測定尺度」を開発した。その結果、教師のキャラクターについては、「おもしろい先生」「優しい先生」「厳しい先生」「親しみやすい先生」などが上位に挙げられた。また、場面としては、「授業中」「休み時間や放課後」「部活動中」などが挙げられた。そして、ほめられ方については、「授業態度をほめられると嬉しい」や「テストの結果をほめら

れると嬉しい」など、193 パターンの称賛方法が挙げられ、KJ 法により 25 個の称賛方法に分類された。

次に研究 2 として、研究 1 で得られた結果をもとに、質問紙調査を行い、「被称賛経験と内発的動機付けの関係性の検討」を行った。その結果、称賛経験と内発的動機付けの関係には正の相関が認められることが分かった。また、研究 1 で得られた 25 個の称賛方法は、努力の過程を称賛するものと結果を称賛するものの 2 グループに分けられることが分かった。

研究 3 では、中学生の学習における内発的動機付けを高める称賛方法の検討として、実験授業を行った。実験授業は、全部で 8 時間であり、中学 1 年生から中学 3 年生までの全クラス（各学年 3 クラスで合計 9 クラス）で行った。授業者の先生は、親しみのある先生 2 名と厳しい先生 1 名で、それぞれの先生に過程称賛と結果称賛を授業内に取り入れてもらい、生徒に質問紙調査を行うという方法で実施した。なお、質問紙調査は、事前（第 1 回授業前）と中間（第 4 回授業終了後）と事後（第 8 回授業終了後）の合計 3 回であり、調査期間は 1 ヶ月半に渡った。分析は、学年ごとに、内発的動機付けの各下位尺度を従属変数とし、群（過程称賛群・結果称賛群・統制群）×時間（実験前・中間・実験後）を独立変数とした 2 要因分散分析と、全学年を対象に、教師のキャラクター（厳しい先生・親しみのある先生）×称賛方法（過程称賛・結果称賛・統制）×時間（実験前・中間・実験後）を独立変数とした 3 要因分散分析を行った。また同時に、性別（男子・女子）×称賛方法（過程称賛・結果称賛・統制）×時間（実験前・中間・実験後）を独立変数とした 3 要因分散分析を行った。なお、それぞれの分析では、「知的好奇心」、「因果律」、「達成」、「帰属」、「挑戦」、「楽しさ」、「学習に関する有能さ」、「自己価値」の 8 個の内発的動機付けの下位尺度ごとの分析と下位尺度の合計点での分析を行っている。

その結果、学年別の2要因分散分析では、称賛方法によって事前よりも事後の方が生徒の内発的動機付けが向上するという結果は得られなかった。しかし、教師のキャラクター×称賛方法×時間を独立変数とした3要因分散分析では、教師のキャラクターの主効果が有意となった下位尺度は「知的好奇心」、「因果律」、「帰属」、「挑戦」、「楽しさ」、「自己価値」で、「挑戦」においては厳しい先生のクラスが有意に高かった。また同じく「挑戦」においては親近感のある先生のクラスでは過程称賛が統制群よりも有意に高かった。下位尺度の合計点で見ると、教師のキャラクターの主効果において有意であった。

次に、性別×称賛方法×時間を独立変数とした3要因分散分析では、「楽しさ」に対しては過程称賛群および統制群における女子の得点が有意に高いという結果が得られ、下位尺度の合計点では、結果称賛において有意差が見られ、女子よりも男子の方が高かった。

以上の結果から、教師のキャラクターと称賛方法の組み合わせとして、生徒の内発的動機付けに効果があると思われるのは、「挑戦」における「親しみのある先生」による「過程称賛」であることが分かった。日々の学校生活においては、親しみのある先生に日ごろの学習の過程を見守ってもらうことが生徒にとって意欲的に学習を続けていくことに繋がるということであろう。また、称賛方法との組み合わせまでには至らなかったが、生徒の内発的動機付けには教師のキャラクターが大きな影響をもたらすことが示唆された。教師のキャラクターとは、温厚だとか怒りっぽいといった教師自身のもともとの性格を指すものではないと筆者は考えている。教師がどのような思いで教育活動に当たっているかがキャラクターとして現れると推測される。例えば、生徒の成長を温かく見守る姿勢でいる教師は「優しい」「親しみがある」と捉えられるであろうし、熱い思いを持って積極的に生徒へアプロー

チする教師は「熱血」「厳しい」と捉えられるかもしれない。

したがって、教師がどのように学習内容を伝達するかだけではなく、教師の教育活動に対する姿勢が教師のキャラクターとして生徒に認知され、その結果、生徒の内発的動機付けに影響を及ぼすと予測される。

また、生徒の性別と称賛方法の検討では、男子はテストや成績など、学習の結果をほめられると内発的動機付け全体の向上が認められることと、女子は日ごろの努力や授業中の態度など、学習の過程をほめられると内発的動機付けの中の「楽しさ」が向上することが示唆された。

以上の結果から、次の4点を本研究の結論として挙げることにする。

1. 内発的動機付けの下位項目のうち「挑戦」については、親しみのある先生による過程称賛が関連している。
2. 教師のキャラクターが、生徒の学習における内発的動機付けに関連している。
3. 男子の場合、学習の結果を褒めることと内発的動機付けの向上が関連している。
4. 女子場合、学習の過程を褒めることと内発的動機付けの向上が関連している。

最後に、今後の課題については、次の4点が考えられた。

まず、実験授業の内容においては、教師のキャラクターをさらに増やすという点である。今回は「親しみのある先生」と「厳しい先生」という2通りのキャラクターで調査したが、「ユーモアのある先生」等、別のキャラクターの先生と称賛方法の組み合わせも検討に値する。

次に、実験授業の内容に関して、授業デザインの際にあらかじめ多くの作業を組み入れておく事を検討したい。授業の中に生徒による作業を入れることで生徒をほめやすくなり、授業にメリハリが出るというメリットがあ

る。当然ながら、効果を均等に測るためにも作業回数は調整しておくべきである。

3 番目に、実験授業に参加する教師の事前研修を充実させる必要がある。普段と異なる授業スタイルを自然に行うためには、十分な練習を実施しておかなければならない。

最後に、質問紙調査に対する生徒の倦怠感をいかに軽減させるかという課題がある。今回は 60 項目から成る調査票を使用した。生徒の倦怠感を軽減するための工夫が求められる。

## 論文審査結果の要旨

水上晃実氏の博士論文審査委員会は2016年5月23日、午前10時10分から11時30分まで国際基督教大学第一教育研究棟の247号室にて口頭試問を実施し、引き続き審査委員会による最終審査を行った。その結果、委員全員の一致を得て、本論文が国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科における博士の学位を授与するに値すると認めた。

本研究は、教師の称賛が中学生の学習における内発的動機付けに与える影響について、教師-生徒コミュニケーションの立場から検証したものである。先行研究に基づき、教師による言語的称賛が子どもの内発的動機に影響があることを指摘したうえで、さらに研究を一步進め、具体的にどのような教師がどのように褒めた場合、生徒の内発的動機付けを高めることができるかについて実証的に研究したものである。

本研究は入念に計画された3つのパートに分かれており、長期にわたり十分な準備を行っていることが評価される。最初のパートでは、自由記述による基礎的な調査を行い、その結果に基づいて2つ目のパートでは、最初の調査研究から得られた項目を利用して質問紙を作成し、どのように褒められたら生徒はうれしいと感じるかについての調査を行っている。論文の前半のパートにおけるこれらの調査の結果から、以下の点が明らかになった。

- ・生徒は、親近性を感じる教師や、厳しい教師に褒められると嬉しい。
- ・生徒は、学習の過程を褒められると嬉しい。
- ・生徒は、学習の結果を褒められると嬉しい。

そして、本研究の中心的な部分である3番目のパートにおける実験授業では、上記の予備的な調査に基づいて、教師のキャラクター（親近性を感じる教師や、厳しい教師）と称賛方法（学習の過程を褒める方法や、学習

の結果を褒める方法)、および性差を独立変数として扱い、そして内発的動機付けを従属変数として扱っている。内発的動機付けを測定する尺度は8つの下位項目(知的好奇心、因果律、達成、帰属、挑戦、楽しさ、学習に関する有能さ、自己価値)によって構成されている。

255名を対象としたおよそ1か月半にわたる実験授業を行った結果、次のような結果が得られた。

- ・内発的動機付けの下位項目のうち、「挑戦」については、親しみのある先生による過程称賛が関連している。
- ・教師のキャラクターが、生徒の学習における内発的動機付けに関連している。
- ・男子の場合、学習の成果を褒めることと内発的動機付けの向上が関連している。
- ・女子の場合、学習の過程を褒めることと内発的動機付けの向上が関連している。

水上氏は上記の成果とともに、実験授業に参加する教師のトレーニングの充実や実験授業の計画の中に、生徒による作業や練習の場面をより多く設けて教師が生徒を褒める機会を増やすなど、研究上の課題についても言及し、この領域における今後の研究者に重要な示唆を与えている。同時に、今回得られた知見や課題は、現場で教える教師にとって大いに参考になると考えられる。

博士論文審査委員会は、水上晃実氏の多大なる努力を認め、優れた論文の完成に心からの祝意を表すものである。